

# フィールドワークにおける二重の外部性 —沖縄の米軍基地反対運動を例に—

## Dual Externalities in Fieldwork -The Case of the Okinawa Anti-U.S. Military Base Movement

新原 将義<sup>†</sup>

Masayoshi Shinhara

<sup>†</sup> 武蔵大学

Musashi University

m.shinhara@gmail.com

### 概要

本研究では沖縄の米軍基地反対運動におけるフィールドワークをもとに、研究者が純粋な参加者ではないという“第1の外部性”と、問題の“歴史的当事者”ではないという“第2の外部性”について議論した。前者については、研究者が啓蒙的な役割を引き受けることで、知的権威を帯び、発達の関係から疎外されるという危険性を指摘した。また後者の外部性が様々な立場からどのように構成されるのかを検討し、これへの直面化が政治的発達の契機となる可能性を指摘した。

キーワード: フィールドワーク, 発達の発達, 境界生成

### 1. はじめに

フィールドワークにおける研究者の“外部性”は、人類学や社会学においても古くから議論されてきた（例えば Gold (1958) [1], Junker (1960) [1]）。従来のフィールドワーク論において議論されてきた、研究者は研究者であって純粋な参加者ではないという外部性を、本研究では「第1の外部性」と呼ぶ。

第1の外部性で議論されてきたのは、あくまでも研究者が外部から訪れることがそこでの観察や研究、参加過程にどう影響するかという状況であり、研究者以外の外部者がそのフィールドに出入りしているという状況はあまり焦点化されてこなかった。しかし研究者ではない外部の者の参加が頻繁にあったり、それが活動の前提条件になっていたりするフィールドでは、参与観察者には“参加目的でなく研究目的でやってきた人”という第1の外部性だけでなく、他の外部からの参加者と同じく“外からやってきた参加者”という“第2の外部性”も付与されることとなる。そして特に、フィールドにおいて内部の者と外部の者が厳しく区別されたり、その間に摩擦や境界問題が生じている場合には、研究者はこの第1の外部性だけでなく、第2の外部性においてもどう対処するのかが問われることになる。

このような二重の外部性が生じるフィールド、つま

り研究に値する社会的価値が問われる事態が生じており、かつ外部の者の参加が頻繁にあったり、それが活動の前提条件になっていたりするフィールドとして本研究が取り上げるのは、沖縄における米軍基地反対運動である。本発表では、フィールドワークの過程で2つの“外部性”がどのように立ち現れるのかを、複数の事例から記述する。これによって、二重の外部性のなかで研究者に問われる姿勢について示唆を得たい。

### 2. 第1の外部性：“研究者”であること

沖縄及びそこでの米軍基地問題は多くの研究者が注目する問題である。例えば10年以上に渡って新基地建設反対の座り込み運動が続く辺野古にも、多くの研究者が訪れる。人類学を学び、辺野古においてフィールドワークを行う大学院生ユキ（仮名）の語る事例1からわかるように、ここでも参加者なのか観察者なのかという、従来のフィールドワーク論で議論されてきた“第1の外部性”が研究者には意識される。

#### 事例1: 座り込みか研究か

それは僕も座り込みたいって思いもあるし、研究の手法としても、特に人類学で一緒にやらずに立ってるっていうのは、ちょっといろいろ、メソドロジ的にも結構、話が難しくなってくるっていうのも、多分ありますよね。一緒のコミュニティの1人として立つっていうのと、そこから部外者として見るっていうのでは、同じ場所を共有しても全く話が変わってくるだろうし、そこからのインタラクションにも違う変化があるだろうなと思ったから座ろうと思ってました。

このように、辺野古において「観察者としての参加者」(Gold, 1958/Junker, 1960)のスタンスをとる場合、座り込み活動への賛意が表明されていけば、外部性が問題化することはあまりない。この活動は基本的に新参者を歓迎する姿勢をとっているからである。しかし、研究者の“第1の外部性”は、基地反対運動参加者との間でのみ生じるのではない。次に示すのは、筆者が

“ウチナー”，つまり沖縄出身者や沖縄在住者の若者集団と食事をしていた時のフィールドノート（一部加筆）である。

事例2：ウチナーの若者が語る「有償活動」言説

…徐々に政治や基地問題に話題がうつると、他の4名からも「政治に関心がある」といわれていたマル（仮名）が積極的に発言をするようになった。

「あれ（注：辺野古の座り込み運動）はヤマトの人がお金もらってバイトでやってるんですよ」

（あーそういうふうに乗ってるんだ）

「ちがうんですか？」

（僕何回か辺野古行ってんですけど、あれ実は逆で、辺野古と往復するバスとかのなかで封筒がまわってくるんですよ。だけどあれはカンパをあつめて、実はお金をもらってるどころか、払ってる）

（一同「えー」「そうなんだ」）

（バスも、そういうお金で、みんなが出し合ってずっとやってる）

「そういう話、教えてもらわないとわからないですね」「教えてもらえてよかったです」

ここで話題となっている“有償活動”言説は、運動参加者の動機づけを、金銭的報酬目当てであると推測し、よって純粋な政治的主張による活動ではないとする言説であり、これまで繰り返し否定されてきた（例えば安田，2021）[1]。しかしこうした言説が、沖縄の若者の間である程度影響力を得ている可能性を事例2は示唆している。

このような、事実と異なる認識に接したとき、研究者がその認識を修正したり、それを通して基地反対運動の正統性を伝えたりという活動は、基地反対運動の参加者という視点からみれば有意義なものであるだろう。しかしその一方で、こうした働きかけは、インフォーマントと研究者との関係性を“知識のある人”と“ない人”，あるいは“教える人”と“教えられる人”といったような、“知ること”が権威性を帯びる関係性に固定化してしまう危険性がある。

基地反対運動をはじめ、ある重要な社会的価値を問うフィールドにおいては、研究者がある種の権威性を引き受けることで、インフォーマントとの関係性が固定化されてしまう危険性を、第1の外部性はもたらす可能性がある。Holzman (2018/2020) [1]は、「知ること」の権威性が人々を発達のなプロセスから遠ざけてしまうことを指摘している。この指摘を考えると、研究者が“第1の外部性”に伴う啓蒙的な役割を引き受けることは、インフォーマントとの間に生じる「知ること」の

権威性をより強化し、フィールドにおける研究者—参加者間の発達のな相互行為から遠ざかってしまうことにつながる可能性があるといえるだろう。

### 3. 第2の外部性：ウチナーでないこと

次に紹介するのは、沖縄出身の母をもちながらヤマト育ちで、現在は沖縄在住の大学生へのインタビューで得られた、辺野古の座り込み活動についての語りである。

事例3：辺野古の活動家は「よそから」の人

あれいっしょをする人たちって、活動するためにはお金が要るじゃないですか。どこからお金が出てくるのか、果たしてどのだけの時間があるのかっていうのがまず疑問なんです。それと、あまりそこに関心なくて、よそからそのためだけに来てる人っていうのが多いんですよ、あれは。（中略）地元の人が一番知ってるので、そういう。

辺野古をはじめとする新基地建設反対運動の正統性を疑問視する視線は、「ニュース女子」事件や「社外取締役 島耕作」事件等にもみられるものである。事例3及び上記2つの事件で反対運動の正統性を疑問視する方法には、次の2つの共通点が指摘できる。第1に、事例2でもあらわれた「有償活動」言説。そして第2に、反対運動が「よそから」来た人によって展開されているものであり、「地元の人」によるものではなく、よって正統でないとしている点である。本研究ではこのうち、後者の運動参加者を沖縄の“外部”に位置づける言説を“第2の外部性”として詳しく考察する。

運動参加者を沖縄の外部に位置づける言説は、基地反対運動の正統性を疑問視する立場から度々指摘される言説であるが、そこには“内”と“外”の境界をどこに置くかが不明確であるという曖昧さが指摘できる。例えば事例3の場合、「よそから」来た人という表現は、沖縄県外から来た人という意味にも、辺野古以外の沖縄県内から来た人という意味にも解釈できる。基地反対運動参加者の“外部性”言説では、“内”と“外”を区別する境界は一義的に定まっているわけではなく、揺れ動きが指摘できる。つまり基地反対運動を疑問視する人々は沖縄の“内”と“外”に境界を引き、運動参加者に外部性というラベリングを行うという「境界生成」（青山，2010）[1]を通して、基地反対運動の正統性を否定することを試みているといえるだろう。

「ニュース女子」事件は、運動参加者の“外部性”言説が、自らを沖縄の外部に位置付け、かつ基地反対運動

にも否定的な立場の人々、つまり Figure 1 で示す C の立場の人々が“外部性”言説を構成する事例である。また事例 1 の学生は、沖縄出身ではないものの祖母と母のルーツが沖縄にあることから、A と C の中間に位置すると解釈でき、この事例から運動参加者の“外部性”言説がウチナーからも一定程度受け入れられていることが分かる。このようにみると、運動参加者の“外部性”言説は主に A や C、つまり基地反対運動に否定的な層から支持されているようにもみえる。

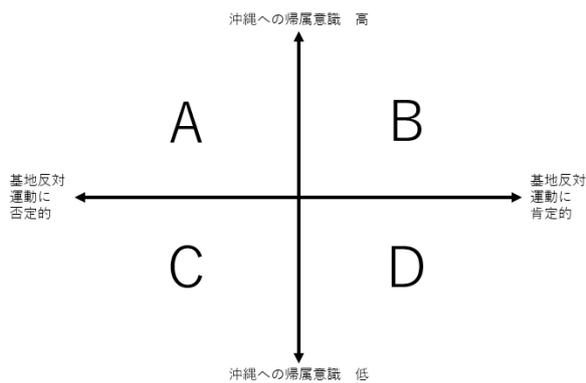


Figure 1 沖縄と基地反対運動への態度のマトリクス

しかし運動参加者の“外部性”言説の構成、そして“内”と“外”の境界生成に関与するのは、基地反対運動を支持しない者だけではない。次の事例は、基地反対運動に参加する 20 代のウチナー、つまり Figure 1 の B に位置する若者サキ（仮名）の発言である。

事例4：ウチナンチュとヤマトの違い

なんだろ……その子が（…中略…）（沖縄県外の自治体）の子で、だからいわば沖縄の子じゃないから、沖縄の人じゃないけどその場に立ってる意味は、ちゃんと考えないといけないと思ってて。だからこの前のその、なんかウチナンチュとナイチャー（注：ヤマト出身者を指す）の違いみたいな、（…中略…）沖縄じゃない人がしゃべってるってところにおいては、そこはその子はすごい配慮しなきゃいけないところで、それこそこっちに来た人が、もっとがんばれよとか言っはいけないと思うんですよね、なんか。（…中略…）この基地の話で、本土とかの話が。でも多分それは、私は本当通じないと思ってる自分がどっかにいて、この話は。

事例 4 のなかで語られるヤマト出身の若者は、サキと共にある基地反対運動の集会に参加し、演説を行った人物である。しかしそこでの発言に対し、サキは「配慮しなきゃいけない」と危うさを感じたと語る。そして運動参加者に“第 2 の外部性”が認められる場合には、

活動や発言に高い配慮が求められるとしている。

この事例では、“外部性”言説は活動の正統性を否定するための装置としては用いられておらず、かつそこで問題とされているものも事例 3 とは大きく異なる。事例 3 のように活動の正統性を否定するために“外部性”が参照される際、問題となるのは活動参加者の沖縄への帰属意識あるいは居住実態といった個人的な属性である。これに対して事例 4 でサキが問題としているのは、沖縄と日本のこれまでの関係性、より詳しく言えば沖縄と本土との不平等で非対称的な関係という、歴史的な問題及びそれに対する理解である。

このように、サキは“外部性”言説を用いてヤマトからの参加者による活動の正統性を否定することはしないが、しかし“歴史的当事者”としての立場から、その活動に対して、沖縄と本土との歴史問題を理解したうえで向き合い方を求めている。また、このような歴史性を伴う“外部性”をヤマトの参加者に指摘したうえで、サキはそれを克服することが極めて困難であることを示唆している。このように、B に位置する者には、“外部性”は D に位置する者による活動が沖縄の歴史的な問題についての理解やそれをわきまえたものになっているかという“歴史的な理解”を問う視点として用いられ、かつ極めて解決が困難なものとして認識されている。

では、このようにヤマトの参加者に対して付与される“外部性”言説を、当のヤマトの参加者はどのように受け止めるのだろうか？事例 5 で語られているのは、ヤマトから運動に参加するマキ（仮名）が学生時代以来 10 年ぶりに辺野古を訪れ、数日間座り込み活動に参加した時のことである。

事例5：ヤマトから運動に参加することの「グロテスク」さ

……みんな、すごいやっぱりもう怒りまくって、抗議してるさなかに、その日、私、帰らなくちゃいけない。みんな怒っている中で、私、時間なんて帰りますって帰らなきゃいけない。（…中略…）すごい一気に、自分の日常の中に戻っていかなくちゃいけないし、戻って行ける。その、別に冷房の効いた部屋にまた戻って行ってしまう。すごいこの、なんでしょう、グロテスクだなとか。（…中略…）その後も 10 年ぐらい、ほとんどそこまで関心持たず、それこそ新聞取ったりとかもだんだんなくなっていったし。（…中略…）アンテナを張ろうと思えば張れたのに、張ってなかったなっていうちょっと罪悪感みたいなものも含めて、何かしなくちゃなっていうふうに、その初めて行ったときとかなに、すごいそれは思っ帰ってきたのを覚えています。

現場を立ち去り本土へと変える必要のある状況になった時、マキは沖縄と基地問題から遠く離れた快適な場所へと戻っていく自分に「グロテスク」さを感じたという。マキの語りからは、ヤマトからの参加者つまり Figure 1 の D に位置する者が、辺野古の座り込み活動をはじめとする基地反対運動に深く関わりながらもなお、ウチナーから“外部性”を付与されるだけでなく、自ら“内”と“外”の境界生成に関与し、自らに“外部性”を見出し続けていることが示唆される。

しかし事例 5 でヤマトの活動家が語る自らの“外部性”は、ウチナーの活動家や座り込み活動そのものと自らを距離化するものとしてのみ機能しているわけではない。例えばマキは、辺野古での経験から「罪悪感みたいなものも含めて、何かしなくちゃなっていくふうに」感じたと語り、その後長年、定期的に辺野古を訪れるようになっていく。つまりヤマトの参加者による自らの“外部性”への気づきは、ウチナーという“歴史的当事者”と自らとを距離化するものとして働くと同時に、より深く継続的な活動への参加を決意する契機としても機能しているといえるだろう。

#### 4. まとめ—外部性への直面化と発達

本研究では、フィールドワークにおいて研究者が直面する 2 種の“外部性”について、沖縄の基地反対運動におけるフィールドワークの事例をもとに考察を行った。このうち、研究者が啓蒙的な役割やそれに伴う知的権威性を引き受けるか否かという“第 1 の外部性”について、それを引き受けることはフィールドや活動、参加者もしくは研究者自身が発達から疎外される可能性があることを指摘した。

また、研究者のみならず活動の“外”からやってきた参加者に対して付与される“第 2 の外部性”は、活動の正統性や向き合い方を問われる、あるいは参加者自身が自分と“歴史的当事者”とを距離化するものとして構成されていた。また“第 2 の外部性”を付与された参加者は、自身でもそれに直面化し葛藤するが、同時に“第 2 の外部性”への直面化を契機として、活動へのより深く継続的な参加を決意していた。まとめると、“第 2 の外部性”は、参加者を活動から距離化すると同時に、参加者が政治的な考えや姿勢をより鮮明にし確立していく、つまり政治的に発達していく契機としても機能していたといえるだろう。

このことは、研究者も、“第 2 の外部性”に直面化し葛藤していくなかで発達できる可能性を示唆している。別の言い方をすれば、“第 1 の外部性”における発達からの疎外を乗り越える契機が、実は“第 2 の外部性”にあるといえるのではないだろうか。“第 1 の外部性”において知的権威を引き受けることで、研究者は周辺の立場から一気に活動の“内”へと引きずり込まれる。しかしそのことは同時に、研究者が“第 2 の外部性”に直面化する契機が奪われることにもつながり得る。しかしそうではなく“第 2 の外部性”に直面化することは、研究者にとっても何らかの発達の契機となる可能性があるのではなかろうか。この点については、本研究では具体的な事例を示しておらず、今後研究者による“第 2 の外部性”への直面化と発達のプロセスについて詳細な検討を行いたい。

最後に、“第 2 の外部性”は本研究でも示したとおり、様々な立場から否定的に付与されることもあるが、近年では政治活動における第 2 の外部性の重要性を指摘する動きもある。例えば東 (2023) は、「観光客」的な立場からの政治運動への参加の重要性を指摘している [1]。本研究は観光客による観光が政治的発達につながっていく具体例を提示するものであり、かつ観光客が自らの観光客という立場に自覚し葛藤することの重要性を指摘するものである。この点については本研究では深く扱うことはできなかったが、これも本研究の今後の課題としたい。

#### 文献

- [1] Gold, R. L. (1958) “Roles in Sociological Field Observation”, *Social Forces*, 36, 217-223.
- [2] Junker, B. (1960) “Field Work Chicago”, University of Chicago Press.
- [3] 安田浩一 (2021) “沖縄へイト”基地反対の民意へのパッシング 新垣毅他 これが民主主義か? 辺野古新基地に“NO”の理由 影書房, 165-186.
- [4] Holzman, L. (2018) *The overweight brain: How our obsession with knowing keeps us from getting smart enough to make a better world*. East Side Institute Press. (岸磨貴子・石田喜美・茂呂雄二編訳 (2020) 「知らない」のパフォーマンスが未来を創る — 知識偏重社会への警鐘. ナカニシヤ出版.)
- [5] 青山征彦, (2010) “境界を生成する実践—情報を伝えないことの意味をめぐって”, *駿河台大学論叢*, 41, pp.207-217.
- [6] 東浩紀 (2023) “観光客の哲学増補版”, *ゲンロン叢書*.